

「じゃあ、君は今まで運がよかつたんだね」

暗い廊下に硬質な靴音を響かせ、前を歩く男は振り返りもせず、そう言った。

「運がよかつた？」

深沢修二は潜めた声で問いかけた。コンクリートを剥き出しにした低い天井の下で、裸電灯が鈍い音を立てて点滅している。

「ああ、そうだ。君は運がよかつた」

男は変わらず平淡な口調で続けた。

「だけど、これからはそうもいかない。結婚を控えていたり、子どもが生まれたばかりとか、そういった事情があれば稀に免除されることもあるがね。この所内では輪番制が基本だから、いずれ君にも回ってくる」

男はその場で立ち止まり、ポケットの中から鍵の束を取り出した。目の前には天井までそびえる頑強な鉄扉。男は鍵束の中から一本を選び出すと、慣れた手つきで錠前を開け始める。

「深沢くん、といったっけ？」

「はあ」

名を呼ばれ、深沢は気の抜けた返事をした。電灯の明かりに晒され、見るも無残な禿げ頭が否が応にも目に入る。でっぷりと肥えた男の巨体は、襟ぐりが白く汚れた濃紺色のブレザーと揃いのズボンに包まれていた。深沢と同じ刑務官の制服だ。

「ここに入る前に一つ忠告しておこう」

そこで男はようやく、ちらりと深沢を盗み見た。頬肉で潰れたアーモンド型の瞳の中に、土気色の肌をした痩せ男が映り込む。垂れがちな三白眼に若白髪の交ざった長い髪。無愛想に反り返る低い鼻から左頬にかけてはケロイド状に引き撃った傷痕が広がる。五年前の事故で負ったやけど傷だ。

見慣れた自分の顔にうんざりと視線を逸らすと、男は恩着せがましく咳払いをした。

「ここから先で目にする事、耳にすることは、まだ若い君には些か毒が強いかもしれない。けれど決して吞まれないことだ。感情を殺し、物を言わぬ石になれ。それが所長として贈る私からの言葉だ」

男はそう言うと、ゆっくりと錠前の栓を抜いた。重い鉄扉が錆びた音を立てて開かれる。

深沢は目を細め、暗闇の中を見渡した。中央の通路を取り囲むようにして、左右に幾つも連なる監獄。よく晴れた昼下がりの午後だというのに、拘留所の北側に築かれたこの一画だけはまるで別世界であるかのように、ひんやりとした冷たい風が足元から吹きあげてくる。かすかに鉄錆のにおいも孕む生風は、外の通気口から下水管の空気も一緒に運んでいるようだ。

「さあ、深沢くん。君の職場に案内しよう」

蛙を潰したような気味の悪い声に促され、深沢は高い背を屈め、慎重に鉄扉をくぐった。

前を歩く所長の背に黙って従い、一〇四九、一〇五〇、一〇五一……独房の扉に書かれたプレートの番号を声に出さず確認していく。深沢が以前勤めていた刑務所でも、独房や懲罰房の類は珍しいものではなかった。だが、この場所は違う。今、深沢が通されたのは、全国でも七箇所しか存在しない死刑囚を収監する施設。丁矯正管区管轄S拘留所。そこが、この四月から深沢が新しく配属された職場だった。

「今、この拘留所には執行待ちの死刑囚が二十六名いる。君にもいざれ彼らの世話をしてもらうことになるかもしれないが、まずは所の雰囲気慣れてもらうことから始めよう」

二歩先を歩く肉塊がやじろるべえのように左右に揺れている。両手を後ろ手に組んでいるため、ひどくバランスが悪いようだ。所長の声は少し弾んでいるようにも聞こえる。この拘留所に新人を受け入れるのはずいぶん久しぶりのことだとさつき呟いていたから、嬉しいのかもしれない。

だが、深沢の耳には所長の言葉など、もう微塵も届いていなかった。

——あの男は？ あの男はどこだ？

深沢の頭を巡るのはそのことばかりだ。

——吉田信一はどこにいる？

長い通路を歩きながら、深沢は爬虫類のように左右の監獄へ目を光らせた。

死刑囚たちはすべて番号で管理される。だから、扉越しではこの中のどこにあの男がいるのかはわからない。だが、今この場に並ぶ独房のどこかに吉田がいる。そう考えるだけで言い知れぬ昏い興奮に深沢は身震えた。

ここまで来るのに丸七年かかった。刑務官を志す前から数えれば、十五年だ。深沢は元々頭のいい方ではない。落第寸前で県立高校を卒業したあとは町工場で奴隷のように働きながら、寝る間を惜しんで勉強をした。晴れて刑務官試験に受かったのは、深沢の二つ年下の妹が成人式を迎えた年だった。

刑務官なんて、と妹は苦い顔をしていたが、深沢にはどうしても刑務官にならねばならぬ理由があった。

今、このときもいつ刑が執行されてしまうかわからない。刑務官となり、全国の刑務所を転々と回り勤務に励む間も、深沢は常に焦燥感に駆られていた。早く、早くしなければ吉田が殺されてしまう。吉田の刑が自分

以外の刑務官の手によって執行されてしまう。

そして、この春ようやく異動希望が叶い、ここS拘留所へ配属になったとき、深沢は辞令を手に十五年ぶりに歡喜の涙を流した。

——すべては、吉田を殺すために。

——すべては、十五年前、両親を殺した男の命をこの手で奪うために。

その夢があと少しで叶いそうなところまで、ついに自分はやってきたのだ。感慨に胸が詰まって、知らず喉の奥から低い笑い声がこぼれた。

「深沢くん？」

急に笑い始めた深沢を不審に思ったのか、所長が首だけで後ろを振り返る。

思えば、十五年前のあの日から自分の人生はずいぶん狂ってしまった。吉田を殺したいのは、何も両親の仇を打ちたいという理由だけではない。死刑は刑が確定されてから、執行されるまでに平均で約八年かかる。

両親を殺し、自分の人生を狂わせたあの男が今も監獄の中でのうのと生きているという事実、深沢は耐えられなかった。

もちろん、自分が犯罪被害者であることは誰にもばれてはいけけない。刑務官が公正に職務に当たるよう、採用の際に縁故私怨は徹底的に調べあげられる。だから、深沢は名前を捨てた。この世でたった一人の妹も叔父の家に養女に出し、深沢は新たな姓を買った。仮の結婚相手として用意されたのは写真でしか見たことのない女だった。金さえ積めばこの世で手に入らないものはない。

そうやって、自分は今までもうまくやってきた。そしてこれからも。

「深沢くん？ どうしたんだね」

気がつく、所長の顔が鼻先近くまで近づいていた。危うくぶつかりそうになり、すんでのところで深沢は立ち止まった。舌打ちを隠し、頭を下げるふりをする。

「すみません。物珍しいもので、つい……」

詫びながらも、口元に酷薄な笑みが浮いてくるのを止められない。そんな深沢の様子を見ても、所長は訝しげに眉を寄せるだけで、特に注意などはしてこなかった。たださえ左頬に大きなやけど痕のある『ワケアリ』そんな自分だ。面倒なことにわざわざ自分から首を突つ込みたいと思う人間はそうそういない。所長もその種の人間のように、呆れたようにため息をつくとき再び無言で歩き始めた。

灰色の壁がどこまでも続く殺風景な廊下に、二人の靴の音だけが響き渡る。独房を通り過ぎ、次の鉄扉にさしかかったところで、深沢は名残惜しげに背後を振り返った。

このS拘置所に吉田が収監されているという情報はあらかじめ得ている。後は機を見て接触し、死刑執行の任務に志願すればいい。誰もが嫌がる仕事だ。手を挙げずとも、新人にはすぐお鉢が回ってくるだろう。それまでは、どんな雑用にだって耐えてみせる。何だつたら吉田だけでなく、この拘置所に収監されている死刑囚全員の執行ボタンを押してやつてもいい。この手で合法的に人間を殺すことができる、そのための立場と口実をようやく手に入れた。

長年温め続けた復讐の計画がいよいよ完結を迎えようとしている。その予感に、深沢は胸を熱くした。

「告解の死神」

と、ふいに所長が口を開いた。ぼそりと呟くような声は、薄暗い廊下にやけに不気味に響く。

所長は突然何を言い出したのか。深沢が顔をあげると、

「告解の死神。この名を君は聞いたことがあるかね？」

と言つて、所長はおもむろに後ろを振り返った。口元にどこか嘲るような笑みが浮いている。まるで自分を試しているかのような表情だ。途端にムツとして、深沢は唇をへの字に曲げた。

死神？ 死神と言われてすぐに思い至ったのは、死刑執行を務める刑務官の俗称だ。公には使うことを決して許されない、刑務官同士での暗黙の呼び名。だが、所長が発した言葉は違う意味を指しているような気がした。所長は一体自分に何を訊きたいのだろう。「告解」という聞きなれない単語が枕詞についているのも気になる。もしかしたらこの拘置所内だけで使用している何かの隠語なのかもしれない。

「いえ。知りませんが」

素直に首を横に振るのは悔しかったが、下手に知ったかぶりをして墓穴を掘るのはもつと嫌だった。一応今日から上司になる相手だ。吉田の刑を執行する目的を果たすまでは、無駄に揉めるのは得策ではない。そう判断し、深沢はぶつきらぼうに答えた。

「なら、最初に挨拶をしておくべきだろう。これから君も嫌と言うほど世話になるだろうからね」

すると、所長は満足そうに頷いた。ますます言っている意味がわからない。深沢が露骨に眉をひそめるのを気にした様子もなく、所長はどんどん暗い廊下を進んでいく。

「この拘置所には二種類の死神がいる。一つは我々刑務官と、そしてもう一人。——告解の死神だ」

「死神……」

そして、幾つもの角を曲がり、見えてきた突き当たりの部屋の前で、所長の足は止まった。